# 現代妖奇異聞録

ルナサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
現代妖奇異聞録

【Ｎコード】
Ｎ０４６１Ｚ

【作者名】
ルナサー

【あらすじ】
妖怪や物の怪といったモノ達が出没する町で、日常を守る二人の少女。彼女達は、現代における陰陽師を名乗る……。といったらカッコいいけど、学校生活に、妖怪退治。今日も二人でがんばってます……。

## 序夜　陰陽師（前書き）

どうも、ルナサーです。
一話完結型である、この現代妖奇異聞録、楽しんでいただければ幸いです。

# 序夜　陰陽師

日常に日常ではない―即ち、非日常―が干渉する町、上弦町（じょうげんまち）。夜は人ならざる者、怪異や物の怪達の時間。その夜に、巫女姿の二人の娘が、何かを追いかけ走っていた。一人は、月明かりだけでもよくわかる茶色の髪をポニーテールにし、真っ黒な目をしている。もう一人は、光を拒むセミロングの黒髪に、夜闇に赤く光る目。だが、明かりの前では黒い目をし、そして首には、幅の広いチョーカーを付けている。

その二人が追いかけている相手は、白い長髪の若い女。その額には、角が生えている。

「このっ、待ちなさい！　鬼女（きじょ）！」

「今夜こそは逃がさない！」

待て、と言われて待つ者はいない。それが、人ならざる者であっても同じこと。案の定、

『待て、と言われて待つ愚か者がいると思うのか？！』

と、返された。当然、速度は落ちない。狭い路地を上手に曲がる。茶髪の娘が舌打ちした。

「らちがあかない……。未希、はさみ撃ちにしよう！」

「了解、結美。じゃあ後で」

未希―佐伯未希（さえきみき）は、鬼女が真っ直ぐ通った十字路を右に曲がって行った。結美―神城結美（しんじょうゆみ）は、鬼女を追って真っ直ぐ進む。上弦町は彼女達の庭のようなもので、どこを通ればどこにつながるかをよく理解していた。だから、行き止まりに誘導するのも簡単。誘い込んだ行き止まりの壁はどれも高い。幾ら鬼女でも飛び越えられない。

『な……。行き止まりだと……』

「さぁ、観念して貰おうか……」

結美が札を取って鬼女に言う。未希は到着が少し遅れて結美の隣に立つ。鬼女は観念したようにゆっくりと振り返った。が、

『こんな所で捕まってやるものか！！』「！！」
と、腕を刃物に変形させて結美の首を斬ろうと襲いかかった。咄嗟のことで反応が遅れた結美を、未希が突き飛ばす。鬼女の腕はコンクリートに突き刺さった。そのがら空きの横腹を、未希は容赦なく蹴り飛ばす。手加減無しで出された蹴りを、守ることもせず受ければ、人であろうとなかろうと気絶する。もちろんこの時もそうで、鬼女は吹っ飛ばされて気絶した。
「ありがと、未希。じゃ、封印するね」
「お願い。今日は札を忘れた」
結美は、札に印を施し鬼女に張り付けた。鬼女は、その札の中に吸い込まれて消えた。
「お疲れ様。陰陽師さん達」
背後から、男の声が聞こえた。振り返った二人はあからさまに、面倒だ、という顔をした。
「「……こんばんわ、新堂所長……」」
新堂所長―新堂修司（しんどうしゅうじ）は、優しげな微笑を浮かべた。
「まだ、鬼女以外の目撃証言はない。今夜の仕事はこれで終わりだ。……それはそうと、君達は鬼女を式神として使うかい？」
「……私は使わないけど、結美は使う？」
「いや、私も使わないよ」
「そうか……。じゃあ貰うよ？」「「どうぞ」」
修司は、嬉しそうに鬼女が封じられた札を受け取った。帰ろうとする修司を結美が慌てて呼び止める。
「ちょっと所長！　バイト代！　すっぽかす気ですか？！」
「おおっと、忘れてた。今回は契約人がよかったからね。はい、十万ずつ。じゃ、本当にお疲れ様。陰陽師さん達」
未希と結美に十万ずつ渡すと、今度こそ帰って行った。彼が暗闇に消えると、二人も互いに挨拶を交わして家に帰って行った。

“陰陽師”と修司は二人を指してそう呼んだ。この二人が上弦町の夜の非日常を彩る、怪異とは違う“色”だ。彼女達は怪異を封じる者。日常を維持していく切り札なのだ。

## 壱夜　神隠し

少年が一人、桜の蕾が揺れる夕暮れ時を歩いていた。遊びに夢中で帰るのが遅くなったようだ。暗いのは怖い、と少しだけ急ぎ足になる。近道するために公園を横切ろうとした時、声が聞こえた。

「ねぇ、こっちにおいでよ。一緒に遊ぼう……」

その夜、その少年は家に帰って来なかった。

鬼女を封じてから二日間、特に怪異の目撃情報、噂は無かった。高校生である二人の情報源は高校生活での噂話。これが一番役に立つのだから怖いものだ。

「ねぇねぇ知ってる？　行方不明者の話」

未希に部活の友達、鎌原紗季（かまはらさき）が言った。彼女は未希と同じ陸上部員で、噂話が大好きなのだ。大体、未希の怪奇情報の情報源は彼女だ。

「？　行方不明者の話って何？」

「最近、昼に外に出て夜帰って来ないって人多いんだって」

「……そのうち帰ってくるって」

「それが、もう一週間位帰ってないらしいよ」

「え……？」

一週間位、その言葉に未希は反応した。鬼女を封じたのが二日前。それより前から行方不明者が出ている。噂も情報も無かったはずだ。何故、という疑問が彼女の中を駆け巡る。所長が情報を掴んで無かっただけだろうか。

「始め家族は家出だって思ってたみたい。でも、増えたのは昨日からあたりらしいよ。問題視され始めたのも昨日から」

「（そういうことか）……そうなんだ。じゃあ、もしかして……」

「そ。全部活停止。部長が言ってた。伝えたからね！」

こんな事が起こる度に部活中止。部活の為に登校しているような

ものなのに、と未希はため息をついた。
チャイムが鳴る一分前。クラスが違う紗季は慌てて教室を出て行った。それから昼休憩までの授業の内容は未希の頭には全く入ってなかった。席が後ろなのをいいことに、結美にメール。もちろん、バレないように。しかし彼女はメールを送信した後、見事に教師に携帯が見つかり、没収されなかったものの説教を受けた。

昼休憩に結美のクラスに弁当を持って行き、食べながらその話をした。
「う～ん。その情報は侮れないなぁ。……そうだ！　帰り、寄ってみようよ。もしかしたら、そのまま仕事になるかも知れないけど……」
箸を咥えながら、結美は言った。行儀が悪い、と呟いた未希は口の中にある物を飲み込んで結美に返す。
「賛成。じゃあ、終わるまで待ってて。こっちのＳＨＲは長いから」
「了解」
やはり五、六時間目の授業も、未希は心ここにあらずの状態だった。

学校帰り、二人は家とは正反対の方角へと歩いていた。不気味だから、学校では近寄るなと言われている家。そこはある事務所。未希と結美のバイト先。入るのも気が引ける。
「入りますよ、新堂所長」「……」
「……返事がない、留守のようだ。と、いうわけで結美、帰ろ……」
「いや、ゴメン！　居るから！　居るから帰らないで！！」
未希の言葉に、奥から慌てて修司が出てきた。いつものサラリーマンのようなスーツではなく、上下ジャージ。似合っていないジャージに笑い出しそうなのを堪えて、結美が学校で聞いた話をしようとした。が、
「……その話は中の方がいいね。外で、誰かに聞かれちゃまずい」

という事で、不気味な家……事務所の中に入った。
中はいろいろな、彼女達曰くガラクタ、修司曰く大切なもの、が足の踏み場がない程溢れていた。修司は“ガラクタ”を避けながら、二人はそれを蹴り飛ばしながら奥の部屋に入った。
「まぁ、君達の話をじっくり聞いている時間はない。こっちにも依頼はきている」
情報早いなと、呟いた結美と未希の前にお茶が運ばれて来た。お茶運びをする人でも雇ったのだろうか、と二人は顔をあげると、そこには二日前に封じた鬼女がニコニコしながら立っていた。
「えっ、ちょっ、オイ、新堂所長?！　何やってるんですか?！」
「？　驚く必要はないよ、結美ちゃん。ただ、お茶運びを雇うお金が無いから、彼女にやって貰っているだけさ」
普通は驚く。驚くなという方が無理だ。彼女を普通の人が見ても大丈夫なのだろうか。
『我をお前たち以外の者が見ても、鬼には見えぬ。我はそういうモノだ』
二人の心を見透かしたように鬼女が言う。
「……そう……ならいい」
それに呆れながら、未希は返した。
鬼女のせいで話がそれてしまったね、と修司は言うと机の上のファイルを手に取った。
「行方不明者に共通しているのは、帰り道にある公園を横切った、ということだ」
「……その公園はどこなんですか？　この町の公園は二つですよ」
「もちろんわかっているさ、未希ちゃん。上弦第二公園だ。不気味な噂が絶えない所だよ」
うわぁ、と結美が呟いた。彼女が帰り道にたまに通る所だ。不気味だが、横切ると近道になる。修司はなおも続けた。
「夕暮れ時の事件だから、今から仕事になるよ。準備は大丈夫?」
「大丈夫な訳ない。確か、札預けていたと思うんだけど……」

札がなければ怪事件の解決は難しいものがある。人ならともかく、人ならざる者ならの話だ。
学校帰りの仕事に備えて、二人は怪異事件の解決に必要な物を彼に預けている。
「ああ、かなり預かっているよ。二人合わせて四十枚位」
「私は式神の札二枚と、普通のやつ十三枚。結美は？」
「十三枚も要るの……？私は式神の札二枚と、普通の札十枚でいいや。そんなにあってもしょうがないし」
「分かった。鬼女、金庫の中にある。持ってきてくれ」
『うむ』
鬼女が帰って来るまで、お茶を飲みながら、どのような状況で遭遇したのかを修司はわかり易く二人に話した。

夕暮れの道を二人は言われた通り急ぎ足で帰った。例の上弦第二公園をよこ切ろうとした時だった。
「ねぇ、こっちに来てよ。一緒に遊ぼう……」「「！」」
声のした方を未希と結美は同時に見た。そこには、可愛らしい少年が立っている。結美が、警戒していることに気付かれないように少年に言う。
「いいけど、何して遊ぶ？　私達、暇じゃないの」
「何でもいいよ、お姉ちゃん達。遊んでくれるなら、何でも……」
少年は楽しそうに答える。結美の警戒心が強くなったのを、未希は感じた。結美の手をさり気なく握り、未希は反対の手で札を取る。彼女には、結美が連れていかれそうに見えたのだ。それは、あながち間違いではなかったようだ。結美の緊張が目に見えてとける。
「そうね。じゃあ、こんな遊びはどう？！」
未希は少年に向かって、いきなり手に持った札を投げつけた。それは少年に張り付く。甲高い悲鳴が静かな公園に響いた。張り付いた札が地面に落ちた時には、少年は気絶して倒れ、その子の背後から巨大な蜘蛛が飛び出し、二人に襲いかかってきた。

飛び出した巨大な蜘蛛の攻撃を、二人は左右に分かれることで辛うじて避けた。蜘蛛は未希の方を向いた。標的は未希のようだ。確信した彼女は、気絶している少年とは逆の方向へ走り出した。

「未希！　公園から出るの？！」

「出ない！　結美、あの子お願い。多分、神隠しに遭った子だ！」

叫んだ結美に未希が返し、結美と少年からなるべく離れる。結美が少年の方へ走ったのが見える。適当に離れた所で足を止めると、薄ら笑いを浮かべ、学校カバンから別の札を取り出し、少年の言葉を真似て呟く。

「さぁ、一緒に遊ぼうか……」

結美は未希に言われた通り少年の方へ走った。気絶している少年に張り付いていた札は、何かを封じた証拠に黒ずんでいる。札を地面に置き直し、彼女は印を結ぶ。置いた札から、小さな蜘蛛が出てきた。結美はその蜘蛛をつまみ上げて言った。

「他に隠した人は何処？　案内して」

蜘蛛を下ろすと、それは公園の隅の公衆トイレに向かって進んで行った。結美は札を持ち、起きる気配のない少年を背負ってその後をついて行った。

未希は、激しい蜘蛛の攻撃に苛立ち始めていた。避けるだけで精一杯になりつつある。

「……何でこいつ、怒っているの……？　繁殖期だったっけ……？」

繁殖期なら、この蜘蛛は子持ち。大量に行方不明者がでるのも頷ける。そして、厄介極まりない。取り出した札を蜘蛛に投げてみるも、効果は薄いし簡単に引き裂かれた。そして、それどころか、

「お……っと。……まさか、マジギレ……？」

もっと怒らせたようだ。体を使った体当り、足を使って周囲を薙ぎ払う攻撃以外に糸吐きまでついた。気が付いたら、未希の背中にフェンスが当たる。後ろにはもう下がれない。蜘蛛が足を振り上げる。

未希はとっさに、足の下をくぐって蜘蛛の後ろにまわった。やっと息を吐いた未希はカバンから別の、模様の入った札を取り出した。蜘蛛は、崩れたフェンスから足が抜けてないようだ。未希は札に息を吹きかけ、呟く。

「出番だよ……。かまいたち……」

蜘蛛の後ろ足二本を風が傷付ける。未希の周囲に長い体のイタチが現われた。

子蜘蛛のあとをついて行った結美は、公衆トイレの後ろの蜘蛛の巣に人が捕らえられている事を確認した。蜘蛛を札に戻し、背負った少年を降す。繭状になっている人とそのままの人がいる。結美は、ため息をつくと学校カバンから模様の入った札を取り出し、息を吹きかけて呟いた。

「頼んだよ……。烏天狗……」

『……御安い御用……』

年老いた男の声が、すぐ隣から聞こえた。手に羽根団扇を持ち、翼のはえた老翁が現われた。彼は、蜘蛛の巣と捕らえられている人々を見て眉をひそめ、主である結美に言った。

『相手はどうやら、女郎蜘蛛のようじゃのう。子持ちの封印は苦労物じゃろうな』

「……うわぁ……。早く終わらせて未希を助けに行こう……」

女郎蜘蛛、巨大なメスの蜘蛛の妖怪だ。人を食い殺しそれを養分に生き、繁殖期になれば人を攫って卵を産み付ける、少々厄介な妖怪だ。

烏天狗は、御意、と言うと羽根団扇で風を起こした。その風は蜘蛛の巣を一瞬で粉砕し、繭状になっている人の糸をも切り刻む。捕われていた十五人全てに札を付け（何故か札は十七枚あった）、産みつけられている蜘蛛の子―土蜘蛛を取り除く。トイレの反対側から、まだひどい音が聞こえる。結美は札を回収すると、そちらに烏天狗と共に向かった。

足を斬り裂かれたことに気付いた蜘蛛は、声にならない悲鳴をあげ、やっと後ろを向いた。面倒くさいという顔のまま、未希はかまいたちに指で指図する。頷いたかまいたちは、その身を回転させ、再び風を起こした。蜘蛛が吐き出した糸は、風に切り裂かれ未希に当たらない。風は徐々に蜘蛛を攻撃していく。蜘蛛は何度も身悶え切り刻む風を避けようとしている。が、

「……見苦しいな……。助けたくなるけど、人の為だから……。大人しくしてね……」

かまいたちが起こす風が一段と強くなる。未希の身長よりも高い蜘蛛の前足が千切れた。蜘蛛が声にならない悲鳴を上げ、前のめりに倒れ込んだ。未希はかまいたちと共に後ろに飛び去ると、蜘蛛の顔の辺りから再度攻撃を開始させた。そこに、結美が烏天狗と共に駆けてきた。

「未希、大丈夫？」

「大丈夫、もう終わる。行方不明者は全員助け出せたみたいだね」

「うん」

『……女郎蜘蛛にしては小さいのぅ……。まだ、子を育てたことのない子供じゃな』

烏天狗の言葉に、結美は自分の式神を見たが、未希は反応しなかった。もう、蜘蛛は動かない。辺りに青黒い体液が飛び散っているが、そのうち蒸発するだろう、と未希も結美も気にしなかった。

「結美、この蜘蛛貰っていい？」

「いいよ。不気味だから、私は使わない」

「ありがとう」

結美に許可を得て、未希はかまいたちを札に戻した。そして、何も書いていない札と筆ペンを、カバンから取り出した。結美は烏天狗を札に戻して未希から離れ、未希が空中に字を書いていくのを見ている。筆ペンを振って片付け、文字と共に札を蜘蛛に向かって投げた。文字が蜘蛛に絡まってから、札の中に消える。彼女がそれを拾

い上げた。
「「仕事終了」」
二人の声が重なった。もう、辺りは真っ暗だ。結美がそれに気付いて、慌てて家に向かって走って行った。じゃあ、また明日、と未希に言うのは忘れなかったが。親のいない未希は帰っているであろう兄の顔を思い浮かべながら、救急車を呼んだ後、家に向かって歩いて帰った。

後日談だが、次の日の朝、救急車で運ばれていった十五人は行方不明になった日以降の記憶がなかった。そして結局、犯人が見つからないこの事件は、世間で神隠しと呼ばれることとなった。

## 弐夜　虎

深夜。町が、人が、動物が寝静まり返る時間。その中を歩く、奇妙な影。その影に名を付けるとすれば、それは虎。

女郎蜘蛛を封じた翌朝、結美はいつもより少し早く家を出た。理由は特に無いが、家に何となく居づらかった。昨日結局、こんな遅い時間まで何をしていたのか、と母親に怒られたのだ。バイトは許されていても、バイトと部活以外で遅く帰って来ることは許されていない。昨日は急きょ入った為、連絡を入れそびれたのだ。

「おはよう、神城さん。今日は早いのね」

「おはよう、佐藤さん。今日は家に居づらかっただけ」

佐藤明日花は結美のクラスメイトだ。おしとやかと言う言葉を体現したような人で、大抵誰よりも早くに学校へ来る。部活はしていないらしい。結美は彼女と少々話をする程度で、友達という程ではない。そんな彼女が結美に、言いづらそうだが話し掛けてきた。

「神城さんは、この近所で虎を見たことがある？」

「虎？！」

突拍子もないことに、結美は思わず素っ頓狂な声を上げた。すぐに、明日花が静かにするようジェスチャーで言う。

「ご……ゴメン。でも、何で虎？　犬や猫ならまだしも、虎は普通見ないよ」

「だよね……。でも昨日の深夜、変な声がするなって起きてみたら、道路に結構大きい虎がいたの」

「？　寝ぼけてたんじゃないの？」

「違うよ。母さんも、父さんも見たって……。神城さんの家って私の近所でしょ？　だから聞いてみたの」

確かに、結美の家は明日花の家の近くだ。だが、深夜まで起きている程夜更しはしないし、昨日はバイト疲れから早く寝た。特に変

な声はしなかったはずだ。
「分らない。疲れて寝てたから……」
そう、と明日花が言ったのを聞いたかと思うと、今度は教室のドアが勢い良く開いた。誰が来たのか、と二人はドアの方を見た。そこには、
「あ、おはよう、中条君」
「あ、おはよう中条君。バスケ部、朝練無かったの？」
「ねぇよ。あったとしても今日は行かねぇ。それより佐藤、神城、昨日の夜虎見なかったか？」
入ってきた中条佑都（なかじょうゆうと）は、突然二人にそう聞いた。彼は、上弦高校のバスケ部副部長。結美と未希の通う上弦高校はスポーツがさかんだ。その中で、バスケ部は全国で優勝した経験のある強豪。その副部長が朝練を休みたくなるほどの事件のようだ。
「やっぱり！　中条君も昨日の夜見たんだ！」
「え？　なに？　結局見てないの私だけ？」
「なんだ、佐藤は見たのに神城は見てねぇのかよ……」
若干落胆したように佑都は言った。やはり、彼等にしてみれば重大な事件のようだ。それから次々と登校してくるクラスメイトは口々に昨日の夜虎を見たか、と話をしだした。中には、結美と同じように見ていない者もいたが、殆んど全員がそのことを知っていた。朝のＳＨＲが始まるまで、少なくとも結美は、話に入れない孤独を味わっていた。
一時間目終了後の休み時間に、未希が教室に来た。いつも通りの無表情に結美は少しだけホッとした。
「おはよう、未希。珍しいね、休み時間に来るなんて」
「おはよう、結美。クラスに居づらくてね。みんな、虎の話で盛り上がってるから」
やはりそっちも同じか。結美は少し嬉しくなった。一人では無かった。
「せっかく来てくれたのに悪いけど……、私の次の授業、体育なん

だ」
「……体育か……。なら帰る。居づらいけど……。後で話そう、じゃあね」
「じゃ、後で」
未希が教室から出ていく。結美も、体操服を持って更衣室へと向かった。彼女達は二年で、廊下には中庭が見えるよう窓が付いている。その窓に、同級生たちが張り付いて中庭を凝視している。
「……ウソ……。本当に居たの……？」
「本当にいたんだ、虎……」
口々に漏れる、感嘆の呟き。結美も窓から校庭を見た。確かに、虎がいる。だが虎は、結美が見た途端霞みのように消えた。周りの生徒は、あっと声を上げ、消えた、と呟いた。
結美は、遠目で虎と見えたモノに多少の不気味さを覚えながらも、更衣室へと駆けて行った。その後結美は、昨日の未希同様、昼休憩まで心ここにあらず状態だった。体育の授業でも、怒られたのは言うまでもない。

昼に来た未希に、校庭で見た虎の話をすると、案の定彼女は渋い顔をした。
「……消えたって所が気になるなぁ……。でもなんにも起こってないなら、仕事にもならないし。でも、気になるなぁ……」
「気になる、しかさっきから言ってないよ、未希。とりあえず、所長にはメールしてみた。返って来ると思うよ、そのうち」
うん、と気のない返事を返してきた未希に、若干不安に思いながらも結美は、未希と共に弁当を食べ終わった。
「今日、私部活だから、先帰ってて」
「了解」
未希は陸上部所属している。週五の部活だ。一応、結美も部活に所属しているが、書道部は週一の部活である。しかも基本、未希と共に帰れない。分かっていても、必ず未希は部活の有無を結美に言

って行く。中学校からのクセのようだ。
六時間目の授業の最中、メールが入った事が分かった。バレないように携帯電話を開く。メールの返信、修司からだった。虎に関する依頼は来ていないが、調べるのは構わない、と書いてあった。詰めていた息を吐くと結美は、当たらないことを祈りながら化学の問題に取り掛かった。

ＳＨＲ後結美は、未希が部室に走って行くのを遠目で見てから学校を出た。とりあえず、急きょ仕事が入った、と家族に電話して虎の捜索を開始した。学校から離れた場所で、カバンの中に忍ばせていた札を取り出す。模様の入ったそれに息を吹きかけ、呟く。
「土蜘蛛、おいで……」
札の上に小さな子蜘蛛が乗る。昨日、結美が封じた蜘蛛だ。子供だが、ワラワラいると捜索の手伝いになる。その調子で十五匹全て呼び出すと、一匹残して散らせ、虎を捜索させた。
子蜘蛛を散らせてから一時間が経過した。摘み上げていた一匹が盛んに足を動かし始めた。まるで、降して欲しい、と言わんばかりに。
「見つけたんだ。いいよ、案内して」
子蜘蛛を降すと、小さな足でとことこと歩き始めた。結美はその後ろで子蜘蛛を踏まないように気を付けながら歩く。近くの曲がり角を曲がったその場所に、校庭で見た虎が居た。居たというより、他に放していた蜘蛛の吐いた糸に足を取られてもがいていた。子供とはいえ、吐く糸はかなりの強度を誇るようだ。
「なんだ……。この間抜けな光景……」
呟かざるを得なかった。
子蜘蛛を一匹ずつ片付けるのも面倒だったので、まとめて札に息を吐いて片付けた。普段なら、式神にその札を張り付けるのだ。
蜘蛛が消えたことで、虎に絡んでいた糸が消えた。虎がゆっくりと起き上がり、結美の方を向いた。その顔は、虎ではなく猿。見え

にくかった尻尾は蛇だ。胴体と足の部分だけが虎。結美は思わず独り言を大声で言っていた。
「ヌエじゃん！　誰だよ、虎だって言った奴！！」
ヌエ、猿の顔に虎の体、尻尾はヘビという日本の古くから伝わる妖怪だ。何故このヌエを虎と勘違いしたのだろう……。
どうでもいいがこの声にヌエが反応し、結美に飛び掛った。彼女は、出会い頭の一撃を避けて戦闘体制に入った。ものは試しと、ヌエの顔面辺りを自分の手で殴ってみるが、手が痛いだけで効果がない。
「なんか、腹立つなぁ。……仕方ないか、生身だし……」
呟くと、カバンから札をだし、息を吹きかけて烏天狗を呼び出した。出てきた烏天狗は、ヌエと周りを見て不思議そうな顔をした。
『おかしいのぅ……。周囲の人間が何故、こんな騒音にも関わらず出て来ないのか……』
「……？　確かに。普通なら、誰か来るね……」
不思議に思いながらも、結美と烏天狗はヌエの攻撃を避けた。天狗は持っている羽根団扇を振って風の刃を作り出し、ヌエを攻撃した。が、
『……全く効いとらん……』
「だね……」
顔を左右に振っただけで、　効いている様子はない。ヌエは、仕返しとばかりに尻尾の蛇や、虎の爪で攻撃してくる。結美は攻撃を回避しながら、何故だか無性にイライラしてきた。原因は恐らく、彼女の式神が押されているということ。だが、一度に二体の式神を操ることは普通出来ないし、この状況で式神を変えるのも無理な話だ。しかし、ヌエは攻撃の手を緩めようとはしない。
（烏天狗を変えなければ……まずい……！）
結美は直感で気付いたが、手遅れだった。ヌエの尻尾の蛇が、烏天狗の右腕を喰い千切っていったのだ。
『ぐぅ……。やられたわい……！』
「っ……。これ以上は危険だ……。戻って、烏天狗」

式神が受けた傷は、衝撃となって術者に帰ってくる。喰い千切られた衝撃は、結美にとって十分苦しいし、烏天狗は失いたくない。窮地に立たされる事は分かっていても、式神を札に戻さずにはいられなかった。結美を守る者がいなくなったのを好期と思ったのか、ヌエの攻撃が一段と激しくなった。

「……くっ。子蜘蛛を出すわけにはいかないし……。どうしよう……」

呟いた結美に、一瞬だけスキが出来た。ヌエはそれを見逃さず、尻尾の蛇で結美を襲う。その蛇は結美の左腕に噛み付いた。とっさに蛇は振り払ったが、腕に牙が残ってしまったのが分かった。途端、結美は激しい目眩に襲われた。

「……っ毒……？！　ヌエの蛇が毒蛇なんて聞いたことないよ……」

目眩がさらに酷くなり、立っていることすら難しくなった結美は、地面に座り込んでしまった。その結美に、ヌエは虎の爪を振り上げる。思わず結美は目を閉じた。が、何時までたっても覚悟した痛みは来ない。そのかわりに、

「逃げ切れないってわかって目を閉じるのは、殺してくださいって言ってるようなものだ、って前言わなかったっけ、結美」

という、どこか辛辣な言葉と頭を叩かれる僅かな痛みが降ってきた。恐る恐る目を開けた結美が見たのは、分厚い本を手に持ち、鞘に入れたままの刀を横一文字に構えた、巫女服姿の未希だった。

「み……未希……。あ……、あれ？　部活は……？」

「とうに終わった。今八時。結美のお母さん、心配してたよ」

いまだ目眩の収まらぬ目で、結美は周囲を見回した。にわかには信じられない事だ。未希と結美そしてヌエのいるこの場所はまだ夕暮れ時を演じている。

「混乱するのも分かる。ここは幻覚と共に“作られた”場所だから。ちょっと妖霊図録（ようれいずろく）を持ってて」

と言うと美希は、分厚い本、妖幽図録を結美に預けた。この図鑑、中を見たことは無いが、未希は、佐伯家退魔の七つ道具の一つだ、

と言っていた気がする。
　と、急にヌエが未希に向かって飛びかかってきた。この空間に侵入された事に腹が立ったのだろう。未希はそのヌエを一瞥して、刀を抜き様に真二つに切り裂いた。結美は目眩が収まるのを感じ、未希の隣に立つ。
「……ヌエ倒すの簡単だった……？」
「？　まだ幻覚に侵食(おか)されてるの？　あれは本体じゃない。見てて」
　未希は結美に言うと、刀を鞘に入れ、自分の前で横に構えた。そして、口の中で音にならない音で呪文を唱えながら刀を回し始めた。刀の軌道が光の筋となり、空中に五芒星を作り出す。目を丸くしている結美の隣で、未希はできた五芒星の真ん中を鞘に入った刀で貫いた。薄い氷が割れるような音と共に、周囲の景色が急速に夕暮れから夜へと変わっていく。完全に変わった後、そこは見覚えのある場所となった。
「あれ？　ここ、神社の前の空き地じゃない？」
「……本当だ……。まさか、ここに繋がるとは思わなかった。……あちこち探し回ったのに……」
　何故か息が上がっている未希と話す結美の前には、幻覚の中で見たヌエが横たわっている。恐らく、未希が幻覚を破壊したため、その反動で気絶でもしたのだろう。
「……結美、封じないの？」
「え？」
「……いいよ。……これ、ほとんど結美が倒したものじゃない……」
「ん……。じゃもらう。ありがとう」
　未希が結美から少し距離を取り、結美は筆ペンと札を取り出しヌエを封じた。封じてから結美は、まだ息の上がっている未希の方を向き、至極真面目な顔をして、
「ところで未希、その刀持ち歩いてて大丈夫なの？」
と急に聞いた。呼吸を落ち着けて未希は冷静に、
「これは刃がないの。傍から見れば玩具(おもちゃ)同然。人を斬るものじゃな

いから」
と答えた。答えてからあまりに滑稽なやりとりに二人は笑った。
この後未希は、結美の弁護の為に彼女の家に行かねばならなくなった。

## 昼の部　第一話　兄と従兄（前書き）

昼の部は外伝扱いです。が、これは物語の進行上外伝に入れざるを得なかった部分です。２．５話扱いです。どうぞ、楽しんでください。

## 昼の部　第一話　兄と従兄

結美と未希がヌエと戦っている時、空き地の目立つ暗闇の路地で、二人の男が無数の異形の獣達に囲まれていた。囲まれている二人の身長は同じくらいだが、髪と目の色が違っていた。一人は、少し長いこげ茶の髪に黒目。もう一人は、漆黒の短髪に茶色っぽい目。

「おい、貴仁。奴さん、やけに多くないか？」

こげ茶の髪の男が半ば呆れながら、背後にいる黒髪の男に言った。その声の端々には、呆れながらも楽しげな雰囲気が混ざっている。それを見抜いたように、貴仁―佐伯貴仁（さえきたかひと）が嗤う。

「ふん。楽しんでいるによく言うな、拓人。……まぁ、いいストレスの発散材料だが……」

ボソッと付け加えた言葉を、拓人―神崎拓人（かんざきたくと）は聞き逃さなかった。

「へぇ、ちゃんと分かってんじゃん。なら固いこと言ってないで、行くぞ貴仁！」

「お前が俺に命令すんな！」

拓人が、はしゃぐような声で貴仁を呼ぶ。その手にはいつの間にか、妖しい色合いの日本刀が握られていた。そんな拓人に悪態をつきながらも、貴仁は二本の短刀を出現させて、それを握る。二人の纏う雰囲気が、殺気立つものに変わる。その空気の誘われるように、異形の獣達が一斉に二人に襲い掛かってきた。

口元だけの笑みを浮かべ、貴仁はまず、襲い掛かってきた獣達を両手の短刀で切り裂いた。

「鬱陶しい……。切り刻んでやる……！」

呟いた彼は、腕を交差させて振り下ろす。巻き起こった風が、獣の数をさらに減らした。激しい風だが、道路に傷は付いていない。

「ちぇ。俺より乗り気じゃないか」

「黙れ。俺は早く帰りたいだけだ。……仕事で疲れた……」

「ん～……。まあそうだね。仕事は疲れるし、これはある意味残業

だし」
拓人は言葉を切ると、視界の端から飛び掛ってきた獣を数匹、日本刀で切り捨てた。刀に獣の血が付くが、それを落とそうとはしない。
「……弱いものいじめに飽きた。燃え尽きろ！」
笑いながら言った拓人の握る刀に付いた血が発火する。彼は刀を振り、その火の粉を生き残りにふりかけた。残り全ての獣達それを受け、発火し燃え尽きる。数があった割に、全滅させるのは早かった。二人は周囲を確認し、武器を片付けた。周りには、何かが燃えたような跡も臭いもない。
「数がいたから、もうちょっと楽しめると思ったのに……。あっけない」
「雑魚で助かった。大物にでもあっていたら面倒だった」
「そうかぁ？　俺は、手ごたえがあるほうが良いけどな」
拓人は、貴仁の面倒くさそうな物言いに笑いながら返した。

いつの間にか、春の月が空の頂点に輝いている。そのぼんやりとした光が二人と、足音無く近づく招かれざる客を照らす。彼らはまだ、その存在に気付いていない。近づくそれは拳を握ると、未だ気付いたそぶりを見せぬ二人の頭上に勢い良く振り下ろした。が、それが殴ったのは、コンクリートの地面だった。
「喜べ拓人！　てめぇが望んでいた“手ごたえのある”敵だぞ！」
攻撃を避けて拓人に向かい、嫌味をたっぷり込めて貴仁が言った。同じように攻撃を避けた拓人は、苦笑いを浮かべるしかなかった。まさか、実際に来るとは思わなかった。
「確かに、手ごたえのある敵と戦いたい、って言ったよ。けど、なんで牛鬼（ぎゅうき）が出てこなきゃならないんだ。こいつはめんどくせぇよ！」
牛鬼、鬼の一種で非常に獰猛な、下半身が牛の妖怪である。牛鬼は力がかなり強いため、対処することが非常に面倒なのだ。
「貴仁、た……「断る」「まだ全部言ってねぇ！」

拓人が言いたいことを全て言う前に、貴仁は素早く拒絶した。しかし、牛鬼の標的は貴仁の様で、彼は牛鬼から繰り出される攻撃を前後左右に回避し続けている。
「って、なに言ってんだよ？！　標的はお前だろ！」
「どう考えても、呼んだのはお前だ。支援はしてやる、狩れ」
連続攻撃を回避しきって、貴仁は拓人に言う。牛鬼からの攻撃に少しの間が空いた。その隙に、彼はもう一度短刀を出す。が、それが精一杯だった。牛鬼の、成人男性の頭部ほどの拳の攻撃を、貴仁が回避するだけの時間が無い。彼はその拳を二本の短刀で受け止めた。一時、力が釣り合い、両者共動かなかった。が、流石に力の差が大きすぎた。一歩、また一歩と、貴仁が後方に押されていく。
「っ……。おい拓人！ぼさっとしてないでやれよ！」
牛鬼に見向きもされず、背後に佇んでいた拓人に、貴仁が怒鳴る。彼が封じているのは腕一本。いつ、もう一つが飛んでくるか分からない。しかも、この状態を維持し続けるのは無理がある。
「げっ、バレた？　大丈夫、一瞬だ！」
「！　サボってやがったのか！！」
「サボってた訳じゃないって。タイミング、見計らってただけ」
そのままウィンクしそうな軽いノリで返され、貴仁は思わず脱力しそうになった。が、このまま力が抜けてしまえば命に関わる。危惧する前に、拓人が再度出現させた刀で、牛鬼の太い首を一太刀で切り落とした。切り口からは、血ではなく黒い霧が噴き出す。それが出て行くにつれ、牛鬼は小さくなっていき、やがて消えた。
「……こいつ、どれだけ負の感情を食ってきたんだ……？！」
「さぁな、興味も無い。……それより、牛鬼が生まれていたことのほうが問題だ」
ふっと息を吐いて、拓人の疑問に貴仁がどうでもよさそうに答えた。彼らの手からは、先程まで持っていた武器が消えている。
あっ、と拓人が何かを思い出したように、貴仁に聞いた。
「なぁ、貴仁。昨日の深夜、虎見たか？」

「……虎？　ヌエだろ。見てねぇよ。……多分、結美ちゃんと未希が片付けただろう」
会話がかみ合っていない気がするが、拓人は、そうか、と言ってほんの少し笑った。

頭上の月はまだ輝いており、別れた二人を静かに照らす。
彼らもまた、陰陽師。日常への、非日常の介入を防ぐ、守り人にして、最終砦。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0461z/

---

現代妖奇異聞録

2011年12月17日08時47分発行